保育現場における保育者の実践知とは
－「ノリ」に着目して－

The practical Knowledge of nursery teachers in a nursery school
－Focusing on “rhythms”－

正部家 あゆみ
Ayumi Shobuke

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 修士課程

キーワード：保育者，実践知，専門性
Key words：Nursery teachers, Practical knowledge, Specialty

１．研究目的

本研究の目的は，保育現場における，保育者の実践知を明らかにすることである．

保育に関わる知として，若林・杉村（2005）は，「実践知，身体知，暗黙知など名称は様々であるが，行為や活動自体のなかに知を認める立場」の知として「活動知」，「研究者が提唱した理論や専門書や教科書等に書かれているような知識」を「一般知」，「個人レベルの学習・指導論に，保育観，子ども観，発達観などを合わせたもの」を「個人知」，「各人が共同体の中でのコミュニケーションをとおして構成する知」を「協働知」と名づけ，4つの知を挙げている．そして，これらの4つの知が意識や思考の働きにより，相互に循環的に関連づけられ，自己内・個人間で葛藤することにより「知の再構築」（本研究でいう，専門性の向上）が行われるとしている．さらに，若林・杉村（2005）は保育者の専門性向上のために保育者自らの実践を振り返る「保育カンファレンス」によって，「個人知」や「協働知」の揺らぎが伴い，その結果「個人知」に変容が見られるとしている．保育においては保育者にそのような変容が起こった後，実際に子どもとの関わりがどのようになされているのか（=「活動知」）が重要である．しかし，若林・杉村（2005）の研究において，「活動知」との関連についてまでは検討されていない．

保育者の専門性の向上を考える上では，具体的な当該保育者と当該子どもの関係における具体的事実のありようである「活動知」，すなわち実践知を捉える必要がある．

しかし，そもそも保育における実践知を，実際の保育現場における保育者と子どもとの関わりの中で，子どもの姿に基づいた保育者の行為から捉えている先行研究は管見の限り見当たらない．

そこで本研究では，保育に関わる知の中の実践知に焦点を当て，保育現場における保育者の実践知を明らかにすることを目指す．より具体的には，身体的同調である「ノリ」に着目し，保育者が「ノリ」をどのように作り出していくのかを明らかにすることを目的とする．

２．研究実施内容

本研究の研究課題名は，研究助成申請時は「『保育カンファレンス』の有効性はどのように実践に現れるのか」であり，「保育カンファレンス」の有効性が実際の保育の中でどのように現れるのかを明らかにすることが研究目的であった．しかし，現在は先に述べた研究課題名と研究目的に変更している．その理由も含め，研究実施内容を述べる．

当初の目的であった，「保育カンファレンス」の有効性が実際の保育の中でどのように現れるのかを明らかにするため，まずは，「保育カンファレンス」についての先行研究の検討を行った．様々な手法で「保育カンファレンス」が行われていることからその手法の効果について検討した．先行研究を検討する中で，若林・杉村（2005）が指摘しているように「保育カンファレンス」は保育者の「個人知」に働きかけるものである．しかし，保育においてはその後の保育者の子どもとの関わりがどのようになされるかということ，すなわち「活

動知」（以下，実践知）が重要であるが，先行研究において，実践知の変容についてまでは検討されていない．「個人知」に変容が起こったとしても，実際の保育における保育者の子どもとの関わりとしての実践知に変容が見られなければ，保育現場における保育者の専門性の向上には繋がらないのではないかと考える．よって，当初の研究課題は保育者の「個人知」を扱っていたのに対し，現在は保育現場における保育者の子どもとの関わりの専門性である，実践知に焦点を当てることに研究の意義があるのではないかという考えに至った．よって，現在は「保育現場における保育者の実践知とはー『ノリ』に着目してー」という研究課題名の基，保育者が「ノリ」をどのように作り出していくのかを明らかにすることを研究目的に変更し，研究を進めている．

では，次に実践知が保育における先行研究において，どのように捉えられているのかということと，本研究において着目する「ノリ」について述べたい．

まず，保育の実践知についての先行研究には，実践知を明らかにするという目的で研究が行われているものが複数見られた．砂上ら（2009）は，片付け場面の映像に対する保育者の語りを分析することにより，保育者の実践知を明らかにすることを試みている．研究方法として，教員研修用の片付け場面の映像を複数の保育者に見せ，自分だったらどのように子どもに関わるか，保育者自身の行動の在り方を討議した内容を分析している．しかし，ここでの分析は，あくまで保育者の仮定であるため，実際に保育者がどのように行動しているのかという意味では，実践知が十分に明らかになっていないと考える．

また，冨田・高橋（2012）は保育における片付け場面の映像をプロトコルに起こし，先に挙げた砂上ら（2009）の研究での概念とカテゴリーを中心に，保育者の言葉や行動を整理している．しかし，映像の中の保育者が実際にどのような意図で子どもに関わっているのかということについては分析に含まれていないため，保育者の実践知に迫り切れていないと考える．

このように，保育における実践知が，実際の保育現場における保育者と子どもとの関わりの中で，子どもの姿に基づいた保育者の行為から捉えられているとは言い難い．

よって，上記の視点における実践知を明らかにするため，保育者の身体的な動きに着目する．

岩田（2007a）は，「関係的存在としての身体による行動の基底にあるリズムおよびその顕在の程度，すなわちリズム感，また身体と世界との関係から生み出される調子，気分」を「ノリ」としている．そして，この「ノリ」の視点を用いて岩田（2007b）は，保育者が保育において「集団の遊びを読み取るためには，個を対象とする理解ではなく，遊びのノリを読むことが必要である」としている．なぜならば，子どもたちの遊びは子どもたちが遊びの「ノリ」を共有しながら新たに「ノリ」を作り出していくことにより展開していくものであり，大人から独立して子どもたちが「ノリ」を作り出すことが子どもの主体性の形成に繋がるからである．岩田（2007b）は，保育者の役割として「子どもたちの遊び展開において，どのようなノリがどのようにして生成されているかを読みとり，そのノリが子ども同士で生成されることが持続するように関与すること」の必要性を示している．加えて，岩田（2007a）によると，「ノリは身体が生み出すものであると同時に，身体に作用するものである」ため，保育においての「ノリ」とは保育者と子どもとの間で身体的な同調が起こっている場面で捉えられると考える．すなわち，保育者の実践知は，子どもたちとの身体的な同調をどのように作り出すかという保育者の動きに見られるものではないだろうか．したがって，本研究では「ノリ」に着目し，保育者が「ノリ」をどのように作り出していくのかを明らかにすることを目的としている．現在は，岩田（2007a,b）の示す「ノリ」を保育現場で捉える際，それが恣意的なものとならないようにするため，「ノリ」の定義について検討している段階である．

３．まとめと今後の課題

本研究は保育者の「実践知」に焦点を当て，保育者が「ノリ」をどのように作り出していくのかを明らかにすることを目的としている．今後は先行研究を検討すると同時に，研究方法，研究場面，いかに研究データを収集するかを決定し，次年度の本調査に臨めるように取り組んでいく．

付記

本研究は，大妻女子大学人間生活文化研究所令和2年度大学院生研究助成（B）（DB2013）「保育カンファレンス」の有効性はどのように実践に現れ

るのか」より研究助成を受け行ったものである．現在の研究課題名は 2.研究実施内容で述べた理由により，「保育現場における保育者の実践知とは－『ノリ』に着目して－」に変更している．

引用・参考文献

若林紀乃・杉村伸一郎．保育カンファレンスにおける知の再構築．広島大学大学院教育学研究科紀要. 3 (54), 2005, p. 371-372.
砂上史子・秋田喜代美・増田時枝・箕輪潤子・安見克夫．保育者の語りにみる実践知－「片付け場面」の映像に対する語りの内容分析－．保育学研究. 47(2), 2009.
冨田久枝・高橋紗穂．幼場園における片付け場面での年齢差を考慮した援助内容－保育者の実践知と教育課程との関連からの検討－.千葉大学教育学部研究紀要. 60, 2012.
a)岩田遵子．現代における「子ども文化」の成立の可能性－ノリを媒介とするコミュニケーションを通して－．風間書房, 2007, p. 115-116.
b)岩田遵子．「幼児理解」の観念性を問い直す－保育者は子どもの創り出すノリによる「子ども文化」とどう向き合うか－．関東教育学会紀要. 34, 2007, p. 13.